

道元禪師の信に就いて

神 保 如 天

我が高祖承陽大師道元禪師は祇管打坐を勧められ、修證不二の妙道を高揚せられ、直指單傳の佛法を唱道せられたことは何人も知るところである。然るに高祖大師の信仰生活、熱烈なる正信を常に強調せられてあつたことは、餘り多くの人が語らないやうである。といふよりは寧ろ信仰生活などいふことは甚だ縁遠いものゝやうにさへ考へられてゐるのでは無いかと思ふ。信心とか信仰とかいふと、直に他力的な往生淨土でも願ふ者のあることで坐禪をする者は唯さとりさへすれば好いのだと考へてゐるのでは無いかと思ふ。是れは實に大いなる誤りである。宗教にして信の無い宗教は眞の宗教で無い、宗教家にして信の無い宗教家は似而非宗教家である。我が高祖大師は純眞の佛法を擧揚せられた古今に卓絶した大宗教家である。故に大師ほど堅固な信念と熱烈なる信仰とをお持ちになつたお方は多くの祖師中にも餘り類を見ないほどの強烈なものである。大師の謂ゆる祇管打坐も此の信の上に建設せられ、直指單傳

の宗旨も此の信の上に體得せられ、修證一等の佛法も此の信の上に完成せられたのである。只これが眞理を有るがまゝに信する正信なるが故に、一時の感激とか靈感といった熱狂的な信仰で無いからして、或る時代の民心を衝動する際物的のもので無い。古今不變の眞理を其のまゝに信じ、其の眞、其の信を又其のまゝに體現し具現せられたのが大師の行である。大師の佛法を世に稱して行の佛法といふ、其の行は信を以つて根本とし、其の信は佛祖の行履に於いて之を信認したのである。而して其の佛祖は眞理の體現者、具現者なるが故に、この佛祖の行履中に全身心を投ずることが絶對の信仰でもあり純眞の歸依でもある。大師は坐禪が佛祖の眞理を具現する絶對にして唯一の行であることを發見し、其の佛祖の行に絶對信を据ゑつけて、其所から威儀即佛法、作法是宗旨といふ大宗教が展開して來たのである。

佛道に入るには我心に善惡をわけて、善しと思ひ惡しと思ふことを捨て、我身よからん我意ろなにとあらんと思ふ心を忘れて善くもあれ悪しくもあれ、佛祖の言語行履に隨ひゆくなり。吾が心によしと思ひ亦世の人の善しと思ふこと、必ずしも善からず。然あれば人目も忘れ、吾が心をもすて、佛の教へに隨ひゆくなり。(隨聞記卷二)

自己の身心、善惡を忘れば、只一筋に佛祖の行履言教に隨順する絶對歸依、正信のすがたがまざりと此の一文に拜することが出來て實に尊く感ぜられる。

高祖大師は建長四年五十三歳の夏頃から微恙に罹らせられ、翌建長五年の正月六日に八大人覺をお示しになつて昇

後の御遺教を遊ばされた。七月八日に急に病状が重らせられたので義价和尚が驚いて病牀に馳せ参じた。其の時のお示しが徹通禪師御自身の筆で御遺言記録に記してある。

同（建長五年）七月八日御病重増發、義价驚而参拜。堂頭和尚（高祖）示云、汝近前來、義价近前于右邊、示云、今生壽命此病必覺限。凡人之壽命必有有限、（中略）彼此加醫療、雖然全不平癒、此又不_レ可_レ驚、但今生於_ニ如來佛法_一、雖_レ有_下未_ニ明知_一之千萬上、猶悅_下於_ニ佛法_一一切不_レ發_ニ邪見_一、正是依_ニ正法_一取_ニ正信_一上。其大意者只如_ニ日來之所談_一、一切無_レ異、可_レ被_レ存_ニ其趣_一也云々。

永平の兒孫たる者は此の一文を拜讀したゞけでも胸塞がり暗涙を禁ずることが出来ない。豫め入滅の時期を覺悟し、大安心の境に住せられて、心中自ら禁じ得ぬ法悦を味ひながら義价和尚に最後のお言葉として漏らしたまふたのが、「今生、如來の佛法に於いて未だ明らめ知らざるの千萬ありと雖も、猶ほ佛法に於いて一切邪見を發さず、正に是れ正法に依つて正信を取りしことを悦ぶ」であつた。何といふ尊いお言葉であらう。正法に依つて正信を取つた悦びが高祖大師の不滅の生命であり永遠の宗教である。此の時の大師の念頭には病苦とか入涅槃とかいふことは微塵ばかりも認められない。唯歡喜に充ちたほゝるみ、明朗其のものであつたやうに窺はれる。而して正法に依つて正信を取つたところは日來の所談の如し、一切異ること無しとある。されば一代の言説、乃至起居動靜、坐作進退の一々に其の生命が躍動し、其の宗教が活現してゐることを知らしめんとして、其の趣を存ぜらるべしと仰せられたのであらうと思ふ。高祖大師ほどの大善知識でも、如來の佛法に於いて未だ明らめ知らざるの千萬ありと言はれた、この語には謙遜のお氣持も多分に含んで居るとは思ふが、理知の世界は底の底まで掘り下げることが恐らく諸佛に於いても不可

能であらう。此の點に就いては未知の千萬ありとも敢へて遺憾とするには及ばない。只宗教として最も大切なことは一切邪見を發さず正に正法に依つて正信を取ることと無くしてはならない。正信の眼を以つて正法を照らす時には理知の眼の及ばなかつた佛法の窮極をも明らかにすることが出来るのである。正法とは眞理のあるがまゝのすがたで、邪見とは歪められた知の眼で正法を見ることが出来る。正法に依つて正信を取るのが眞の宗教であり正眞の佛法である。

願くは我と一切衆生と今生より乃至生生をつくして正法を聞くことあらん、聞くことあらんとき正法を疑著せじ、不信あるべからず。まさに正法にあはんとき世法をすてて佛法を受持せん、つひに大地有情共に成道することをえん。(谿聲山色卷)

これは高祖大師の所謂發願文と稱するものゝ前文であるが、大師が生生世世を通じての發願であると同時に信決定である。この發願の上に今生に於いて正法に依つて正信を取るの大滿悅を成就せられたのである。これに依つて大師の一生は正信の生活であつたと同時に其の唱へられた宗教のすべてが正信の心的基礎に立つ正法の開演であつたといつてよからうと思ふ。

三

世間の人から能く聞くことであるが、禪宗の坊さんには信仰がない、無道心で困るといふ聲である。禪宗坊主といふ者はイヤに鼻息許り荒くて、佛菩薩を禮拜するにも敬虔な態度は殆ど見られない。昔しの坊さんは多少道心があつ

た、今の坊主には全く道心が無いといふのである。宗門では信心と道心とは殆ど同じ意味に用ひてゐる、故に無信心も無道心も同じことである。信仰も無く道心も無い者は僧侶でもなく宗教家でも無い。信の無い宗教、信仰心の無い坊主、語其のものが既に意義を爲さないものであるが、爾したものがやはり現代に存在してゐるから不思議である。苟も佛弟子といはれ永平の兒孫と稱する者、少くとも佛祖の名の下に衣食する者は、それだけの實を存しなくてはならぬ。單に生活といふ俗的な見解からしても感謝報恩の念といふものが無くてはならない、その感謝報恩の念といふものも亦一種の信仰心の發露ともいへる。況して僧侶となり永平の兒孫となつた者は佛祖の慈恩を知り高祖大師の宗風を信じて正法に活きるで無くては存在の價値が無い。それには能く高祖大師を知らねばならぬ、其の信を知り行を知り坐禪を知ることが必要である。坐禪といへば直におさとり、おさとりといへば古則公案を透ること、而して大悟とか見性とか云つて天地を丸呑にしたやうな大法螺を吹き、佛祖を眼下に見下し、釋迦彌勒は他の奴といひ、佛經祖錄は不淨を拭ふ故紙などいつて雲居の羅漢をきめこむことの如く心得てゐる者が多い。斯うした坐禪も一部に流行つてゐるといふことだが其れは正法ではない。少くとも高祖大師の坐禪ではない。

ただ佛弟子は佛法をならふべし。(辨道話)

すでに佛子なり、外道の見をかたる狂人の舌の響を耳に觸るゝことなかれ。(同上)

狂人の舌の響を耳に觸れてはならない、唯一筋に佛弟子は佛法をならふべきである。その佛法とは言ふまでもなく、正信を根底とした正法を意味する。

設ひ泥木塑像の龕惡なりとも佛像を敬ふべし。黄卷赤軸の荒品なりとも經教をば歸敬すべし。破戒無慚の僧侶なり

とも僧體をば仰信すべし、内心に信心を以て敬禮すれば必ず顯福を蒙るなり。破戒無慚の僧、疎相の佛、麁品の經なればとて不信無禮なれば必ず罰を蒙るなり。然あるべき如來の遺法にて人天の福分となりたる佛像、經卷、僧侶なり。故に歸敬すれば必ず益あり。不信なれば罪を受くるなり。いかに稀有に淺猿くとも三寶の境界をは歸敬すべきなり。(隨聞記卷三)

たとひ泥をつくねた麁惡な佛像でも佛寶である、紙片に書かれた一句一偈の經文でも法寶である、破戒無慚の僧侶でも僧寶の一數である。佛法僧の三寶に歸敬し信仰する眼から見れば麁惡も荒品も破戒も何等關するところでない。形の上の物を尊敬するのでは無い、佛法僧の三寶其のものを尊信するのである。

深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし、生をかへ身をかへても三寶を供養し奉らんことをねがふべし。ねてもさめても三寶の功德を思ひ奉るべし。ねてもさめても三寶を唱へ奉るべし。(道心卷)

佛法僧は正法の體相用であつて正法を正信する者は佛法僧の三寶を歸依し尊信することも亦必然である

西天東土、佛祖正傳するところは恭敬佛法僧なり。(歸依三寶卷)

佛祖正傳するところの佛法とは恭敬佛法僧より外にはない。この恭敬佛法僧を心の上には正信といひ、身の上には坐禪となる。實は身心一如であるから正信と坐禪とは一體でなくてはならない。龍樹菩薩の「身現圓月相、以表諸佛體」といふのも即ち是れであつて、坐禪の相が圓月相、坐禪の體が諸佛體であるから、恭敬佛法僧の當相當體ともいひ得る。今は正信の立場から之を言ふと、恭敬三寶これ正信であつて高祖大師の信仰は決して高尚なる理想論でなく一木一石、一字一句、麁惡細大に拘はることなく、絶對の恭敬と純眞の信念とを以つて之に對せられたことを深く

感銘すべきである。

四

信とは心理作用の一で、俱舍論でも唯識論でも心所有法の一に數へてゐる。其の性質は清淨にして自體が澄淨なるばかりでなく、他の濁穢の心心所をして澄淨ならしめる作用がある。疑の反對で眞理を認許して二心なき心作用でもある。故に疑は二心にして信は一心ともいはれる。金剛般若經に「信心清淨即生實相」といひ、高祖大師が「淨信一現するとき自他同じく轉せらるゝなり、その利益あまなく情非情にかうむらしむ」（溪聲山色卷）といはるゝが如きは能く信の心所の性質を明確に述べてある。然し高祖大師は信を以つて單なる一精神作用とは見て居られない。信は精神全體の作用であつて諸多の作用の一では無くして、すべての作用を統一したところの唯一の精神作用である。又身心一如の原則に依つて心に於ける作用のみでなく、身心一如の作用である。

渾身似信を信と稱するなり。（菩提分法卷）

正信心なり、正信身なり。（溪聲山色卷）

心も正信であり身も正信であつて、正信の外に身心がない、それを渾心似信といふのである。渾身は全身であるが實は渾身心のことであつて、全身心が正信となりきつた時には信の外に身心が無いからして信に似たりといふ。味膾の味膾臭きは上味膾で無いといふと同じで、なれきつた味膾には味膾の臭味が無い。渾身心が正信になりきつた時には信の臭味も無いから、渾身似信を信と稱するのである。故に正信の正は正邪相對の正ではない、絶對の正である。信

も亦疑に對する信ではない、疑不疑を超越した絶對純眞の信である。高祖大師の正信は實に斯の如き第一義的なる絶對信であつた。而も正法に依つて得られたところの正信は高踏的な理論としての信ではなく、宗教的體驗から出發したる、極めて生活に即した正信であつて、即ち大師の全人格が正法と一如し、渾身心が正信に似信し、全生活が正信其のまゝの全現であつたのである。

この正信には本來階級などあるべき筈は無いけれども假に菩薩修行の階段五十二位に比較して言つて見ると、五十二位とは十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺であることは何人も知るところである。五十二位の最下位が十信の位、その最初が發心位、次第に進んで第十が願心位で是れを以つて信位の滿とする。信滿の位は即ち十住位の最初の發心住の位に上つたことである。故に此の發心住といふ初住の位を以つて信決定とし、住不退轉の位とし、淨土教あたりでは之を正定聚位といひ、往生の因決定して退轉すること無しといふ。圓教あたりでは此の初住位が菩薩十地の初地と同じだ、初地初住證道同圓とさへいふのである。華嚴經に「佛海信爲能人」とある如く、佛海に入るには信を根本とするが故に信位は修行の最初に確立せられねばならぬ。十信、或は初住、何れの位を初發心とするにしても信決定することは最も重要なことである。此の信不退位を基礎として十住十行十廻向十地等妙の位に上つて佛果を成就する。今高祖大師の謂はれる信の位は何位にあたるかといふに、

必ず佛果位と隨他去し隨自去す。佛果位にあらざれば信現成あらず。……………おほよそ信現成のところ教祖現成のところなり。(三十七品菩提分法卷)

佛果位を以つて信現成のところとし、佛果位にあらざれば信現成せずといふのである。信現成さへすれば其所が佛果

位で、信と佛果位とは隨自去し隨他去する、即ち信と佛果位と二つ並ぶのではない、故に信現成のところは佛祖現成のところ、佛祖現成のところは信現成のところであつて佛祖と信とは二物で無い。されば階級邊にも在らず諸數にも墮するといふことは無い。最低下に置かれた信が高祖大師に依つて佛果の最上位に昇つた。謂ゆる一超直入如來地で、覺樹王に端坐して深妙法を開演する活作略である。

五

信現成のところが直に佛祖現成のところといふが如き卓拔せる法輪がどうして轉ぜられるのであらうか。

修_レ行佛道_ニ者先須_レ信_ニ佛道_一。信_ニ佛道_ニ者須_レ信_下自己本在_ニ道中_一、不_ニ迷惑_一、不_ニ顛倒_一、無_ニ増減_一、無_ニ誤謬_上也。生_ニ如是信_一、明_ニ如_レ是道_一、依而行_レ之、乃學道之本基也。(學道用心集第九)

この自己本來道中に在つて迷惑せず、顛倒せず、増減なく、誤謬無しといふ信が即ち佛祖現成の信である。

佛祖の往昔はわれらなり、われらが當來は佛祖ならん。佛祖を仰觀すれば一佛祖なり、發心を觀想するにも一發心なるべし。(溪聲山色卷)

往昔も當來も一佛祖にして、一發心の上に現成するわれらの佛祖とは全く二面を存しない。この正信に住するのが學佛道の本基である。然し此の信を發することは却々容易でない、

大凡信_ニ自己在_ニ佛道_一之人最難_レ得也。若正信_レ在_レ道自然了_ニ大道之通塞_一、知_ニ迷悟之職由_一也。(學道用心集第九)

自己本來佛道に在りと信ずるの人は最も得難い。得難しといへども我れ其の人にあらず、非器なりと思ふてはなら

ぬ。是非に管せず、善惡を思はず、身心を放下して、佛道中に投入するがよい。

唯我が身をも心をも放ち忘れて佛の家に投げ入れて、佛の方よりおこなはれて之に隨ひもてゆくとき、力をも入れず心をもつひやさずして生死を離れ佛となる。(生死卷)

身心を佛家に投入した時に、自己本來道中に在つて迷惑せず顛倒せざることを承當するであらう。

佛道を學ぶには解より入るもあり、行より入るもある。解は研究であつて理知を先とする、行は實踐であつて意志を主とする。解は教を對象として智目を明らかにする、行は體驗を味得して行足を活潑にする。故に解行は智目行足にして其の一を缺くことは出来ない。行解相應といふことは學道の用心として忘れてはならないことである。然し其の解も行も必ず信を根本とすべきである。信なき解は單なる學解であつて只文字の葛藤窠裡に分別を逞ふするのみである。信なき行は妄行であつて功果を誇り名利の念を強ふするに過ぎない。信を以つて解する時能く佛心を讀破して文字の滓を残さない、信を以つて行する時能く佛行を行じて行の蹤迹を認めない。解明らかにして行立つて解を忘ずる、之を潛行密用の行といふのである。

唯暫忘_三吾我_二而潛修、乃菩提心之親也。(學道用心集第二)

これは信も解も行の中にかくれて修のみのはれたすがたである。この潛修を即ち證といふのである。證を待つ修でもなく修に待たるゝ證でもないが、證は修の招くところ、修は證の使ふところであつて、修證は全く不二である。之を信解行證の四等の法と稱する。解も信、行も信、證も信で、信を離れて解行證はありえない。之を樹木に喩ふるならば信の根、解は幹、行は枝葉、證は花實である。信根なくして證果なく、幹や枝葉が無くては花實は生じない。

信根が大ならば大なるほど枝葉花果も大であることは言ふまでも無い。

髓を得ること法を傳ふること、必定して至誠により信心によるなり。(禮拜得髓卷)

信心によらざる得髓傳法はあり得ない。得髓傳法は宗乘の極致であつて即ち佛果位であり佛祖現成のところである。

以上聊か高祖大師の信に就いて述べて來た、まだ書き度い問題もあるけれ共、紙面の都合もあるから次の機會に譲ることにする。最後に一言したいことは、實踐宗乘研究會の名は解行證の三を標示してゐて甚だ喜ばしく感ずるが、名と實とが必ず相應してもらひ度いと思ふ。尙ほ既に述べた如く解行證は必ず信に依つて宗教的生命を得るのであつて、是れが正信の上に築かれた實踐宗乘研究でなかつたならば全く意味をなさない。我等永平の兒孫たる者は正法に依つて正信を取るの遺誠を奉じて正信修行せられんことを切に望んで止まない。

佛言、不信之人猶如_レ破瓶。然則不信_レ佛法_ニ之衆生更不可_レ爲_レ佛法之器也。(知事清規監院章)

この一語を記して筆を擱くことにする。